

うっかりしている時

その人の味はうっかりしている時に出る。

うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。

教育の一番ほんとうのところは、しばしば、その人のもち味によって行なわれる。まして、相手が、いわば、最もいい意味で始終うっかりしている幼児たちである場合、我々のうっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているかは考えらるる以上であらう。

うっかりという言葉、うっかりする動作、出あいがしらに、うっかりと見せる顔。その時出る我々のもち味こそ……

と、いって、いくらいもち味の人でも、うっかりばかりしてはなるまい、と、いってまた、わがもち味をつつもうとして、うっかりしている時の全くないのも、つくろいに過ぎよう。そこでこそ、幼児教育はむつかしいものと、昔も今もいわれるのである。

——倉橋惣三選集第三卷『育ての心』(フレーベル館)より——

うっかり笑って

西野 紀代子

保育室で五歳の男の子が古新聞をまるめて刀を作ろうとしている。見るともなく通りすがりに目をとめると、意欲的なその子の気持とは正反対に、まるでなまこのように、グニャグニャの刀ができているのを目にする。「ウフフ、」大人は思わず手を口に当てて笑ってしまう。(笑ってはいけない、と思う心が、手を口に当てさせている。)けれどもその瞬間子どもが眼を挙げる。

「アッ、先生笑った。僕のが下手だと思っているんでしょ？」

「ううん、そうじゃないの。下手だと思ったんじゃないけど、刀ってピンとしているじゃない。○○ちゃんの刀、あんまり違うから……」

弁解してみるけれど、一面ヒヤリとしている。理屈で子どもを納得させまい、と思いつながら、自分のしていることは、やはりそれ以外ではないように思えてくる。

「先生、おたまじゃくしが、バラの花びら食べてるよ」

ある日、見学していた四歳児の保育室で、突然見知らぬ子ども

が、私の手を引つ張った。

「エッ、ほんとう!?」

バラの花びらつて素敵な味がするだろう、味ばかりではなく、匂いもいいし……と思いつながら、案内されて水槽の前に連れていかれた。水槽の横に置いてある花瓶の淡いピンクの花びらが、水の上に散っていて、小さな黒いおたまじゃくしが、花びらの一隅を口に含むような形で、口をバクバク動かしていた。静止している花びらと対象的に小さい黒い口がよく動いている。

「ほんとう!」

こんな小さなシーンに、生きている、ということを感じとったのでもあろうか。小さな黒いおたまじゃくしの動きに、私の心も揺すぶられて、子どもの驚きの気持ちに同感してしまう。私の目を見て、ニッコリ笑うと子どもは、跳ねかえるようにいってしまった。

「あなた、なに言っているの。おたまじゃくしがバラの花びらを食べる筈ないでしょう?」

いっしょに見ていた友だちの言葉がとんでくる。はて!! 女の子は、おたまじゃくしのたべものを、バラの花、と感違ひしたのだろうか? えっ!! いえ、あの子の驚きは、何に對してだったのだろう。ふと考えてみる。私たちは、うっかり感覚的・情緒的

に単純に子どもの感情に迎合してはならないだろう。しかし、子どもの新しい発見に動かされるものが、そこにあったらとすると、「ワァ、ほんとう!」と驚いている時点では、子どもの気持と、ひとつに流れあうものを感じている。それは、もう現象や客觀的事実の奥にあるもの、といつてもいいのではないのだろうか。

倉橋先生の伸びやかな名文の深みは、到底汲み尽くすべくもないけれども、先生の書いておられる、その人のもち味というものを自分なりに考えるとき、それはなにかこう安定してその人の中に備わっている、というものではないように思われる。ある日、ある時、あることが起こる場合に、その人からでなければ生まれでてこないような感性、そうしてその内容のあらわれが、ごくごく短い一瞬に過ぎなくとも、受けとった側の子どもの人間の、一生を変えるほどの影響をもたらす場合もあるのであらう。そこは全くの無手勝流であるだけに、子どもの前に生きていることの内容を深く問われる思いがすると同時に、うっかりしているときだけに、こちら側の人間のまるごとが子どもの前に受けとめられているのであらうと思うと、ある種の畏れを感ぜしめられる。

(所沢市立第二幼稚園)